
事故と恋心と。

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
事故と恋心と。

【Nコード】
N3130D

【作者名】
須賀 隆太郎

【あらすじ】
とある私立高校に通う智美は同じクラスの隆文に片思い。思いを伝えたくても伝えられないもどかしい状況の中、智美は階段から転落する事故に遭い、頭を打ったことで超能力に目覚める。智美の恋の行方はいかに？

FILE・01：プロローグ（前書き）

この作品は、私こと茜坂 空のもう1つのIDだった茜坂 雲雀の名義で出していたものでしたが、IDの二重登録を注意されたことによって削除&雲雀の退会につき、修正してこちらで再掲載するものです。以前のものを読んだ方でも設定が変わっているので楽しめるかと思います。

FILE・01：プロローグ

「トーマー、帰ろうよ」

私立雲西うんせい高校の放課後、2年3組の教室の入り口から五十嵐いがらし 智と美もみを呼ぶ声が聞こえた。

「あつ、エリ。わかった、今行くね」

智美は呼びにきた瀬川せがわ 絵里子えりこに軽く手を振り返すと、教科書をカバンに詰めて絵里子の待つ教室のドアに駆けて行った。

「そういえば、トモ。あんたさあ、隆文たかふみくんのこととはどうにかなったの？」

2年生の教室は3階にあるため、智美たちは階段を降りていたのだが、その途中で絵里子が智美にたずねた。

「ええっ!？　そ、そんなのどうにかなるわけじゃないじゃない!　だって、隆文くんはアメフト部のレギュラーのQBクォーターバック、それに対してあたしはただの帰宅部で、彼の数多い取り巻きのひとりではないんだから……」

智美は慌てて否定した後、しゅん、とへこんでしまう。

「でもさ、その取り巻ファンきの中でアメフトのことを少しでも理解してるのってトモだけじゃない?　他の取り巻ファンきたちはキャーキャー騒ぐだけみたいだし、私も久保くんはカッコいいと思うけど、彼はアメフトに一途いちずな人みたいだから、そういうのをわかってくれる女の子がいいんじゃないかな。そういう意味じゃ私はさっぱりだし。ポジションとかなんて聞いてもどの位置でどんな役割を担ってるのかわからないもの。いっそさ、アメフト部のマネージャーに入って、隆文くんに近づけばいいんじゃないの?」

絵里子が励ますが、智美はへこんだ状態のまま歩いていて階段を踏み外したことに気づいていなかった。

「トモっ！ あぶなっ……」

「えっ……？ きゃあああ！」

帰宅部と言えども智美の運動神経は悪くはない。踏み外した階段をずただだ、と高速で駆け降りる格好になったが、踊り場まであと半分ほどのところでついにつまずき、空中に投げ出され、智美は目を閉じた。

FILE・01：プロローグ（後書き）

階段から落つこちた智美の運命やいかに！？

以下次回！

FILE・02：事故発生・病院へ（前書き）

足を踏み外して階段から転落した智美。
果たして彼女は無事なのか？

FILE・02：事故発生・病院へ

（――あれ？ あたし結構な高さから落っこちたよね……？ それにしては少し頭が痛いだけって……でもって、この暖かいものはなに……？）

智美はそこでようやく目を開けた。

「大丈夫か？ 五十嵐……頭とか打たなかったか？」

そこにいたのは、結衣のクラスメートにして片思いの相手、久保^{くぼ}隆文だった。

「久保くん……どうしてここに？ 部活中のはずじゃ……イタタッ、頭打ったかな……」

智美は信じられないと言った表情で隆文にたずねたが、頭の痛み顔をしめた。

「ん、ああ、アメフトで使う防具のひとつを校舎の中にある倉庫に忘れたことに気づいて取りに戻るところだったんだ。そしたら、すぐ近くで悲鳴が上がってお前が落ちてきたから……ところで、頭打ったんなら保健室行った方がいいぜ。あと、早く降りてくれると助かるな。その格好は目に悪い……」

隆文は頭をかきながら説明し、その後苦笑して目を逸らしながら智美に退いてくれるよう頼んだ。智美は、スカートがめくられて下着がまる見えの状態で隆文の上に乗っかっていたのだ。

「きやあっ！ あたししたら、ずっとたか……久保くんの上に乗っかってたの？ ゴメンね、重くなかった？」

そう言いながら顔を真っ赤にしつつ、スカートを抑えて立ち上がった智美だが、ズキッと頭に激痛が走って再び床に座り込んでしまった。

「ああ、重くはなかった。けど、参ったな。受け止めようとしたときに、本当は腕で受け止めるつもりだったんだけど、間に合わない判断してとつさに滑り込んで身体で受け止めたから、そのときの

衝撃で足を痛めたかもしれねえな……って、五十嵐、すっかりしろ！」

久保が自身の足を気にしているのを聞きながら、智美の意識は遠のいていき、急遽保健の先生経由で救急車が呼ばれることになった。「軽いねんざね。何日か安静にすればよくなるわ」

智美が救急車で運ばれたあと、隆文も保健室で痛めた足を見てもらっていた。

湿布を貼ってもらい、顧問の先生に事情を説明して部活を早引けた隆文は、絵里子と一緒に保健の先生から聞いた智美の搬送先——市内の総合病院に向かった。

2人が病院に着くと、ちょうど智美の両親も駆けつけたところだった。

「おじさん、おばさん！」

絵里子が智美の両親に声をかけると、

「ああ、絵里子ちゃんか。と、そっちの子は？」

智美の父親が絵里子に気づいて返事を返し、その後隆文にも気づいてたずねる。

「あ、ども。はじめまして——」

隆文は痛む足を引きずりながら、両親に自己紹介しようとした。

「とりあえず、智美が心配だわ、話は後にして病室へ行きましょう」だが、母親が隆文の言葉を遮って病室へ歩きだしたので、仕方なく隆文も言葉を飲み込み、みんなで智美の病室へ向かった。

病室へ入ると、もう智美は目を覚ましていた。

「智美、もう大丈夫なの？」

母親が真っ先に智美に抱きついてたずねる。

「うん、階段から落っこちたあたしをそこにいる久保くんが受け止めようと身体を張ってくれたからあたしはこれだけで済んだんだよ。いまは検査の結果待ちだけど、たぶん異状はないと思うよ」

智美はベッドの上で起き上がって話すことができるくらいには回

復しているようだった。

「久保くんと言うのか。娘を受け止めてくれてありがとうな。ケガをしてるようだけど、それは娘を受け止めた時のものなのか？」

智美の父親は隆文のほうを向いて礼を言い、隆文の足に巻かれた包帯に気づいた。

「あ、さっき自己紹介しようと思ってたんですけど、お嬢さんのクラスメートの久保 隆文と言います。足は確かにお嬢さんを受け止めたときに痛めたものですけど、軽いねんざなんで大したことはないですよ」

隆文は改めて自己紹介をし、ケガの理由を話したが大したことはないと言いつづけた。

「そうか。でももしそのケガで病院にかかるようなら言ってくれ。治療費は出させてもらうから」

智美の父親は隆文の足を心配してそう告げたのだった。

検査の結果、どこにも異状は見つからず、頭に小さなたんこぶができただけの智美は、翌日には退院して帰宅することができたのだった。

FILE・02：事故発生・病院へ（後書き）

偶然にも久保が通りかかったおかげで大したことはないように思われた智美だったが……？

FILE・03：学校復帰、そして…（前書き）

2008年です。皆様今年もよろしくお願いいたします。

休載している作品も、できるだけ早い復帰を目指しておりますので、
もうしばらくお待ちください。

復帰のメドが立った際にはブログにてお知らせいたします。

FILE・03：学校復帰、そして…

さらにその翌日、智美は学校に復帰することができた。

智美が登校すると、すでに隆文は来ていて、他のクラスメートたちと笑っていた。足の包帯は外れていて、痛めた足は全く問題ないようだった。

「おはよう、久保くん。こないだはありがとうね」

智美は自分のカバンを机に置くと、隆文の席の横に行って彼に話しかけた。

「ああ、五十嵐、おはよう。もう大丈夫なのか？」

隆文はクラスメートたちとの話を中断すると、智美にたずねた。

「うん、もう大丈夫！ 久保くんがかばってくれたおかげだよ。ホントにありがとう！」

智美は笑顔で隆文に礼を言った。

「たまたまだよ。そんな礼を言われるようなことじゃねえって」

隆文は照れているのか、顔を逸らしてぶっきらぼうに言う、用は済んだだろと言わんばかりに手をひらひらとさせて智美を追い払い、クラスメートたちとの会話に戻った。

仕方がないので引き揚げた智美の後ろで、クラスメートたちが隆文に対して「照れるなよー」などとからかっている声が聞こえた。

と、そんな声に混じって、“まさか礼を言われるなんて思わなかったから嬉しいな”という声が確かに聞こえた。えっ、と思い振り返った智美だが、その視線の先にいる隆文は、「照れてなんかいい」と顔を真っ赤にしながらクラスメートたちに弁解していた。

（気のせいだったのかな……？ まあ、いいや。あたしの空耳でしょ）

聞こえたような気がした隆文の声は気のせいと言うことにして智美は席についた。

「あ、ユッキー、おはよう。あのさ、悪いんだけど、あたしが休ん

でた間のノート貸してくれない？」

そこに、隣の席にいる磯貝^{いそがい} 有希^{ゆき}が来たので、智美はノートを貸してくれるよう頼んだ。

「もち、いいわよ。それにしても、トモも災難っていうかドジよね、ポケットとして階段から落ちるなんて。でも、運はいいのね。偶然久保くんが通りかかって身を挺して助けてくれたんだから」

有希はケラケラと笑いながらノートを差し出した。

「あはは、ありがと、ユッキー。昼休みまでには返すね」

智美は否定できないな、と苦笑しながら有希のノートを受け取ると、朝のSHRまでまだ少し時間があつたのでノートを開いて写し始めたのだった。

「ふう、終わった。ユッキー、ノート返すね、ホントありがと」

「どういたしまして。ってかホントに昼休みに終わると思わなかったわ」

智美は昼休みに入ってすぐに約束通りノートを写し終えて有希にノートを返すことができ、有希は驚いていた。と、そこに隣のクラスから絵里子が顔を見せた。

「トモ、ユッキー、お昼は屋上で食べようよ」

「わかった、エリ。じゃあ、行こっか」

智美と有希は大きく伸びをしながら立ち上がると、それぞれの昼食の弁当を持って教室を出た。

「そつえば、エリ、お弁当は？」

階段まで来たところで有希が絵里子が手ぶらなことに気づいてたずねた。

「あ、ゴメン、言うの忘れてた。2人は先に屋上行っててくれない？ 私、今日お弁当作れなかったから購買行かないと」

絵里子は顔の前で手を合わせて謝ると、購買に向けて階段を降り

ていった。智美と有希は顔を見合わせて苦笑しながらそれを見送り、屋上へ続く階段を上がっていった。

「ん〜っ！ いい天気〜っ！」

屋上に出るなり有希はもう一度大きく伸びをすると、絵里子が来るまで待とうかと言って屋上の床に寝転がった。

「ちよつと、ユツキー、あんた一応スカートなんだからそれはマズいでしょ」

智美が苦笑しながら大の字になって寝転ぶ有希に注意を促す。

「いーじゃん、今日は誰もいないんだし〜」

有希は懽然^{ぶぜん}とした表情をしながらも足を閉じて上半身を起こした。たしかに有希の言うとおり、珍しく屋上には智美たち以外誰もいなかった。普段から屋上は解放されているので、昼休みはちらほらと人がいるものなのだが。

と、そんなことを話していると、屋上の扉が開いて絵里子が出てきた。

「遅くなつてゴメン。購買混んでさ〜。ほい、これあげる」

絵里子はそう言って智美と有希にパックのジュースを投げてよこした。

「おっ、サンキュー」

有希はパシッと音を立ててそれをキャッチしたが……

「えっ、わわっ」

智美はうまくキャッチできずに落としかけた。と、その瞬間。

「トモ……それ、なに？」

ジュースを投げられてキャッチしそこねた智美のぶんのジュースが、空中に静止していた。

FILE・03：学校復帰、そして…（後書き）

手を触れずにモノが浮いた。

果たして智美に何が起こったのか？

ゴメンナサイ、ストック尽きたので更新が少し遅れそうです。

なんとか1週間以内には更新するようにしますので、気長にお待ちいただければと思います。

FILE・04：智美に芽生えた能力

「トモ……？」

空中に静止したジュースのパックを見つめて3人とも言葉を失った。

「な、なによこれ……？」

智美が狼狽したような声をあげると同時にポトリとジュースは床に落下した。

「今のいったいなんなの……？ あたしどうなっちゃってるの!？」

智美はわけがわからないとばかりにわめきちらした。

「トモ、落ち着きなよ。騒いでも何も解決しないよ。とりあえず、さっきのことは置いて、ゴハン食べよ？」

絵里子がどうどうと智美をなだめるように床に置いたままの弁当や自身が買ってきたパンの袋を掲げる。

「エリ……」

智美が一言つぶやいた瞬間、くう、と誰かの腹の音が聞こえた。

「そうだよ。食べないと昼休み終わっちゃうよ。午後は体育もあるし、食べて乗り切ろうよ。今の变なことはとりあえず忘れて、さ」

どうやら腹の音の主は有希だったらしい。バツが悪そうな顔をしながらも、努めて明るく智美に言った。

「うん、そうだね。あんまり考えても答えなんか出ないよね。食べよっか」

智美たちは今起こったことは忘れることにして、それぞれの昼食を楽しんだ。

そして、放課後。智美たちは図書館へ来ていた。

有希が、「さっきのアレはトモが頭を打ったことでなんか起こったのかも」と言い出したので、そんなことがあるのか調べるためだ。

3人で手分けしていろいろな棚をあさり、本を探していく。と、そのとき。

「あつた！　ねえ、これとそっくりじゃない？」

絵里子が見つけたのは、1冊の古い本で、いろいろな超常現象を集めたものだった。その中に、手を使わずモノを浮かしたり動かしたりする少女の話が載っていた。

「確かに似てるかも。もう少しじっくり読んでみよう」

有希がそう言ったが、図書館の閉館時間が来てしまったらしいので、仕方なく智美がその本を借りることにして、3人は図書館を後にして帰途についた。

「超常現象かあ……そんなあるわけないって思ってたけど、あたしの目の前であれば確かに浮いてたし……。どれどれ、どんな感じに書いてあるのかな、っと……」

帰宅した智美は部屋着に着替えると、早速本を開いた。

そこに記された少女の話は、にわかには信じられるようなものはなかった。

19世紀のヨーロッパに、エリス＝マクドナルドという名の少女がいた。彼女の家はあまり裕福でなく、5人兄弟姉妹きょうだいの末っ子だったエリスは街一番の富豪、カンタス家に奉公人として出されたのだ。すぐに使用人として迎えられ、家事をこなしていたのだが、ある日階段を掃除している最中に足を踏み外して転落し、頭を打ってしまったのだ。幸いにもケガは大したことはなく、3日間の休養だけで仕事に復帰できた。

しかし、それからしばらくして、彼女が買い物に出かけた帰り、屋敷への道の途中にある家が火事になっており、破裂音とともに木造の家の柱が彼女に向かって倒れてきたのだ。とっさのことで動けずにいた彼女だが、柱は彼女に直撃する寸前で止まり、それどころ

か彼女は両手に買い物荷物の荷物を持った状態のまま、柱を弾き飛ばした――

と記述されていた。

「確かに似てるけど、結論は何なんだろう？」

智美がボヤきながら次のページをめくると、結論が書いてあり、この事例のエリスの場合、頭を打ったことによって、人間の脳に秘められた何かが発現し、その後のカンタス家に属する研究所の研究で人間の脳はほとんど使われてなく、潜在的にすごい力を秘めている、とされた。だがしかし、潜在能力の開発には失敗し、エリスの能力も数年後には無くなった、とのことだった。

「つまり、あたしは階段から落ちて頭を打ったことによって、超能力が目覚めたってことになるのかな？」

翌日、智美は絵里子や有希にその話をして、結論をそう話すと、

「スゴいじゃん、トモ。今は何かできそう？」

有希が面白がって智美にできるかどうか頼んでみる。

「わからないわよ。あるときだってどうやったかわかんないんだから」

智美はそう自信なさげにつぶやいた。

「うーん、あのと時の状況を思い返してみると、私が購買で買ってきたジュースを2人に投げたのよね。そうしたらトモがキャッチし損ねて、落ちると思ったたら浮いてたって感じだったわね、たしか」

絵里子があのと時のことを思い返しながらつぶやいた。

「そうだったね。じゃあ、また人のいない場所で、いろいろと用意してやってみようよ」

有希がそう言い出し、その日の放課後、屋上で試してみることにした。

そして、約束の放課後。3人は、ジュースに始まり、それぞれの

教科書、辞書などをカバンに詰めて持ち、さらにはどこから調達してきたのか有希が野球、サッカー、アメフトのボールをそれぞれ持っていた。

「それじゃあ、まずは軽いものからってことで、ジュース投げるから。いくよ、トモ。キャッチするんじゃないかって浮かせられるかどうかだからね」

絵里子がそう念を押してからジュースを投げると、智美はそれをじっと見つめて「浮け」と念じてみた。と、そのとき。

「きゃあっ！　なんで私のスカートがめくれあがるのよっ！」

ジュースは浮かずに床に落ち、代わりに絵里子のスカートがふわりとめくれていた。だが、絵里子の叫び声とともに浮か上がったスカートも元に戻った。

「失敗かあ……でも、あたしにそういう能力があるのはたしかみたいね。いま、風はないから、エリのスカートが浮か上がったのはあたしの仕業だろうし」

智美は失敗に少ししよげかえる。

「まあまあ、もう一度やってみようよ。最初から上手くは行かないでしょ」

有希がなだめて、ジュースを拾い上げると、不意打ちで智美に投げてよこした。

「わわっ！　いきなり投げないで……よ……」

智美が慌てた瞬間、ジュースはふわりと浮いた。だが、今回はジュースだけではなかった。今回の調査に持ってきたものの全てが一斉に浮き上がり、空中に静止していたのだ。

「成功だね！　でも、なんて極端な……さっきはジュースひとつ浮かずに失敗、今度は全部まとめて浮かせるなんてね……もう少しコントロールできれば面白いかもよ？」

絵里子が智美や有希とハイタッチして喜び、智美がふう、と一息ついた瞬間に浮かんでいたものは全てポトリと落ちた。

「コントロール、か……そうは言ってもこれ結構疲れるし、何より

こんな変な能力、みんな気味悪がるんじゃないかな？」

智美は少し疲れたのか乱れた呼吸を整えつつ、不安そうに絵里子たちに言った。

「まあ、中にはそういう人もいるかもね。でも、どれだけの人がトモのチカラを否定し、ひいてはトモ自身を否定したとしても、私たちはトモの味方だからね」

絵里子は不安げな顔をしている智美を軽く抱きしめて、その肩をトントンと叩いてあげた。

その後、ひとしきり落ち着いたところで3人は帰途につくのだった。

FILE・04：智美に芽生えた能力（後書き）

だいぶお待たせしていましたが、やっと4話目を更新できました。前回の更新で1週間以内の更新を目指すといった以上、今日がその1週間目なのでがんばりました。

ストック量がまだ十分でないのでまた間隔が空くかもしれないですが、気長にお待ちいただければと思います。

FILE・05：アメフト部、戦場へ（前書き）

今回から3回の予定でアメフトの試合シーンを描いていきます。
ルールなどはわかりづらいかもしれませんが、ある程度の解説は
載せておくのと、詳しいな解説は拙作「ワイルドウィングス激闘史」
の第2部分にルール等の解説を設けてありますので分かりづらい点
などありましたらそちらもご参照ください。

FILE・05：アメフト部、戦場へ

その夜、智美は自室で何を浮かせられるかいろいろ頑張っていた。「ふう、あんまり重いものは動かないわね。今のあたしで浮くのはせいぜい辞書くらいまでか。しかも重さによって浮かせられる高さも違うのね。軽いノートやペンならあまり疲れずに結構自在に浮かすだけじゃなくて動かしたりできるようになってるのかな」

額に軽く汗をかいたのを拭きながらひとりであんなうんと納得して、智美の夜は更けていった。

翌日のHRの時間。担任が隆文を前に呼び出し、智美たち生徒の前で、

「明日は久保が主将をしているアメフト部が関東大会出場をかけて
あまど雨東高校と準決勝をやるそうだ。勝てば文句なしの関東大会進出。負けたとしても3位決定戦に勝てば関東大会に行けるそうだ。会場はうちのグラウンドだから、なるべく応援に来てやるように」

と言った。

「俺からもお願いします。俺たちはみんなの声援が力になると信じてここまで来たから、明日も負けるわけにはいかないんだ。ましてや相手は宿敵の雨東、これは事実上の決勝戦なんです」

隆文もそう付け加え、軽く頭を下げた。

「トモ、もちろん行くつしょ？」

HR終了後、有希が智美にたずねた。

「え？ うん、もちろん行くよ。なんで？」

智美は平然と答え、逆に問いかける。

「いや、私も行くんだけど、あそこでキヤーキヤー言ってるだけのとは一緒にされたくないな、って思ったから、3人で少し離れた場所から見ないかって聞こうと思ったの」

有希が言いながら指した先には、隆文のファンの女子たちが隆文を取り囲んでキャーキャー騒いでいた。

「そうだね。たぶん彼女たちはグラウンドのよく見える場所を確保してキャーキャー騒ぐんだろーし、あたしらは屋上にでも行きますか。上からだ試合が見やすいって聞いたことあるしね」

智美は苦笑しながら有希にそう話した。

「さっすがトモ、アメフトのことを調べてるね」

第3の声に智美が振り向くと、いつの間にか絵里子が智美の横にいた。

「エリ！ いつの間に来てたの？」

智美が驚いた表情でたずねると、

「んー？ 今だよ。うちのHR長くてね。話の内容はこっちと変わらないはずんだけど、なんで時間かかるかな？」

絵里子は苦笑しながら首を傾げたのだった。

そして、次の日。試合当日。

天気にも恵まれた雲西高校グラウンドには、高校アメフトの試合にしてはすごい観客が多かった。とは言っても、大半が雲西高校の生徒による応援団なのだが、中にはスーツを着こみ、双眼鏡やビデオカメラを首から下げた人物も数人ほど来ていた。

「ねートモ、あれってやっぱりスカウトとかそういうのかな？」

屋上に陣取った智美たち。上からグラウンドを見下ろした絵里子とそのスーツ姿の人物を指して智美にたずねた。

「たぶんそうじゃない？ 高校にすごい選手がいるなら大学や社会人チームは争奪戦を繰り広げてでも獲りたいだろうし。今回の目的はたぶんうちのチームの久保くんか、雨東のLB、ラインバック高杉さんじゃないかしら？」

智美はスーツ姿の人たちをスカウトとほぼ見抜き、目的となる選手まで予測をつけた。

「らいんばつかー？ 高杉？ どの選手？」

ポジションの名前を言われてもちんぷんかんぷんな絵里子は智美に聞き返す。

「ラインバックは守備の要で、全ての攻撃を止めることを要求される皆みたいなものね。高杉選手の背番号は40番。ほら、あそこよ」

そう言って智美が指差した先に、ウォーミングアップをしている高杉の姿があった。

「へえ、スゴい体格してるのね。アメフトって防具がゴツイからあまり体格良なくてもマツチヨに見えるけど、ありゃ本物だわ」

有希がそれを眺めてため息をついた。

「そついえば、久保くんは何番？ ヘルメットかぶってるとわからないのよね」

絵里子が久保を探してキョロキョロしだした。

「久保くんは背番号1。エースQBだから、あそこでキャッチボールしてるよ」

今度はグラウンドの反対サイドを智美は指差した。

ユニフォームの色は、ホームチームの雲西高校フェニックスが赤色、ビジターチームの雨東高校ブループラネッツが白地に青の文字だった。本来なら青色のユニフォームなのだが、ホームチームが色付きを着るのでこうなっている。

両校は過去に計20回、この都大会の準決勝または決勝でぶつかり合い、10勝10敗という全くの互角であった。

「行くぞお前ら！ 我ら不死鳥のごとく何度でも舞い上がる！ 邪魔する奴は……『焼き尽くす』！」

雲西高校のフィールドからフェニックスのチーム名から考えられた気合いの雄叫びがグラウンドに響けば、

「蒼き星は水の惑星^{ほし}。その水の力で敵の闘志の炎を消し去るんだ！

我ら『ブループラネッツ』！」

対する雨東高校側も上手いこと考えたと思われる気合いの雄叫びを挙げていた。

——いま、関東大会を賭けた試合が始まった。

FILE・05：アメフト部、戦場へ（後書き）

決戦が、始まる――

FILE・06：前半終了〜ハーフタイム〜後半開始（前書き）

実力が拮抗した2校の試合は熾烈さを極めていた。
同点のまま、試合は後半を迎える――

FILE・06：前半終了〜ハーフタイム〜後半開始

試合は互いに譲らず、前半を終え、7-7で折り返していた。

「前半は互いに1TDタッチダウンずつか。高杉の守備が良すぎてこっちのパスが通らねえ……まあ、逆に向こうは攻撃が手薄なおかげで同点に抑えてるが……後半勝負だな」

ハーフタイムのミーティングで久保は前半を振り返ってそう言った。

「久保、後半はパスとランを上手く使い分ける。ランニングバックRBにアイツを投入する」

監督はそう言いながら、ミーティングに加わらずにアップしてる背番号12を指差した。

「監督……ついに例の隠し玉を出すんですね。わかりました。おい、名前はなんて言うんだ？」

夏休みの合宿からチームに突如として加わり、監督しかその素顔および名前を知らない、駿足のRB。合宿の際に40ヤード走を走らせたなら、脅威の4秒25を叩き出したのだ。正体がバレれば彼に安息の日はないだろうとの監督の命令で情報漏洩を避ける努力を徹底し続けてここまで試合にも出さず、ベンチにも入れてこなかった。もちろん、チームメイトとすら話さない無口な謎の選手と言われた男。

そんな男が、ついに口を開いた。

「私の名は小林、トゥエルフだけど登録名はコバ12。みんなもコバと呼んでくれればいい」

明らかに低く作った声でコバ12はそう名乗った。

「わかった、コバ。それじゃ、後半はウチの攻撃からだ。1発目からコバとレシーバーを使ったトリックプレー行くぞ。できるか？」

久保は時間が迫っているので手短にコバにたずねる。

「私がレシーバーの位置でセットし、RBが中央突破で走ると見せ

かけてのレシーバーたる僕のリバースですね。任せてください」

コバは久保の要求するプレーを正確に理解していた。

「よし、それでいい。行くぞみんな！」

ハーフタイムが終わり、選手たちはグラウンドに出ていった。

少し時間は戻って、ハーフタイムのミーティングをグラウンドでやってるころ、屋上から試合を見つめる智美たちは、ずっと一点を見つめていた。

「あそこでミーティングに加わらずにアップしてる背番号１２は誰なんだろう……？ トモ、知ってる？」

絵里子が智美にたずねるが、

「うっん、今までチームに背番号１２をつけた選手はいなかったから、あたしも知らない……」

智美は首を振って知らないと言った。

「あ、その１２番が輪の中に入ったわ。有希、何か聞こえる？」

絵里子は今度は３人の中で飛び抜けて聴覚に優れた有希にたずねる。

「んと、隠し玉とからんにんぐばつくって言葉が断片的に聞き取れるくらい。さすがにこれだけの声援の中で小さな声を聞き取るのは難しいわよ」

有希は苦笑しながら絵里子や智美に聞き取れた単語を伝えた。

「なるほど、あの１２番は今までその存在を隠されていた秘密兵器ってところね。ランニングバックってことはかなり足が速いんじゃないよね」

智美は有希が聞き取った単語からそんなことを話していると、ハーフタイムが終わったのか選手たちが出てきた。

「ん？ 前半までにはいなかった選手が入ったな。桜井、あの１２

番のデータはあるか？」

雨東の監督は雲西のメンバーで初見の選手がいるのに気づき、マ
ネージャーの桜井にたずねた。

「いいえ、データが全くありません。おそらくこの試合が今大会初
出場じゃないかと」

桜井がそう答える間に、後半が雨東のキックオフで始まった。

ボールを取ったのは久保だった。彼は懸命に走ったが、自陣ゴー
ルラインギリギリから10ヤード押し戻しただけで止められた。

「まあ、いい。コバ、秘密兵器の力、見せてやってくれ」

久保はあらかじめ最初のプレーを決めておいたので作戦会議に時
間はかからず、すぐに攻撃の位置についた。

「セッ^{セツ}、ハット^{ハット}！」

攻撃開始の合図とともに久保がボールを持つと、走ってきた前半
からのRBをスルーし、レシーバーの位置に入って、久保に向かっ
てきていたコバに素早くボールをトスした。

「行けっ、コバ！」

タックルを受けつつもなんとかボールはコバに渡り、倒されなが
ら久保はコバに叫んだ。

「任せてください、久保さん！」

コバはその駿足を最大限発揮し、雨東の守備陣を突破していく。

「何者か知らないけど、この高杉は抜かせないぜ」

コバが爆走を始めた段階で危機を察知したのか、高杉は素早く守
備の最後の砦のポジション、SSの選手と位置を入れ替え、自らが
最後の砦としてコバの前に立ちふさがった。

「高校No.1と言われるLB、高杉さんか……でも、私にだって
この足がある！」

コバはフェイントを使って一瞬のうちに高杉を抜き去り、勝ち越
しのTDを挙げた。
タッチダウン

「おっしや！ ナイスだ、コバ！」

久保はコバをハイタッチで迎えた。ボーナスゲームのキックも決

まり、14-7と雲西がリードした。

「なんという選手だ……高校であれほどの駿足はそういないぞ、雲西はよくあんな逸材を見つけたものだ……」

雨東の監督は隠し玉だったコバの存在に脱帽した。

「やった！ 12番の選手が点を取った！」

智美たちも屋上からコバの爆走を見て、タッチダウンに喜びを爆発させたのだった。

FILE・06：前半終了〜ハーフタイム〜後半開始（後書き）

雲西の秘密兵器・コバの投入により、試合が動いた。

果たしてこのまま勝利を手にすることはできるのか？

そして屋上から応援する智美たちも喜んでいますが、智美の能力のことを忘れてないか？

FILE・07：ハプニング発生、決着

最終第4クォーターに入り、両チームとも1つずつタッチダウンを積み重ね、21-14と雲西高校がリードしていた。

「やむを得ん、最終作戦実行だ」

雨東の監督はタイムアウトを取って選手を呼び戻すと、その一言だけ告げた。

「わかりました」

それに対し返事をしたのは、高杉ただ1人だった。

「なにっ！？ 高杉がオフェンスにも出張ってきやがった！ しかもRBランニングバックってことは、雨東め、高杉の破壊力に任せて点を取りにきたな」

雲西の監督は、高杉の守備面での破壊力を知ってるだけに、敵の攻撃力アップを不安視していた。

「あれっ？ 高杉さんが攻撃にも入ってきたよ？ トモ、なんでかわかる？」

絵里子と有希は今まで守備にしか出てこなかった高杉が攻撃にも出てきた理由がわからず、智美にたずねた。

「うーん、推測だけど、雨東が本気で勝ちにきたのかも。高杉さんは守備で抜群の力があるけど、足も速いから、それを攻撃に生かして点を取りに来たとしたら……ウチが負けるかも」

智美は推測を述べた上で、このままじゃまずいとの見方を示した。「ふーん、どっちにしろ、このままだとウチはまずいことになるってことね」

絵里子がそう呟きながら再び眼下のグラウンドに視線を落とした。

雲西の監督、そして智美が危惧したことは現実になってしまった。高杉が駿足を活かして2つ連続でタッチダウンを奪い、21-27と逆転したのだ。ボーナスゲームのキックを一度外してしまったので1点少なくて済んだのだが、残り時間は約3分。逆転するにはもう一刻の猶予もなかった。

「こうなったら最後の手段だ。コバ、WRはできるか？」
「ワイドレシーバー」

タイムアウトを取った雲西は、久保がコバにポジションチェンジを打診していた。

「ええ、できます」

コバは簡潔にそう答えた。

「よし、じゃあ次の攻撃からWRに入ってくれ。攻撃の内容はそのときの作戦会議で伝える」
「ハドル」

久保はタイムアウトが終わるとの審判からの通告を受けて、手短に話を切り上げてグラウンドに出て行った。今はまだ雲西の守備、ここで雨東の攻撃を抑えないと逆転は不可能になる。

「ここ一本、止めるぞ！」

「オオッ！」

気合の雄たけびを上げて、選手たちが守備についた。

「まずいよ……高杉さんやっぱ強いよ。このままじゃウチが負けちゃう……」

智美はだんだん落ち着きがなくなり、あっちへうろつろ、こっちへうろつろし始めた。

「トモ、少し落ち着きなつて。高杉さんがラインバックのトップクラスなら、久保くんは現役高校生のトップクラスQBなんだから、頭の回転も速いし、何か対策考えてるって」
「クォーターバック」

この試合を見ている間に少しは覚えたのか、絵里子がそう言って智美を励ますのだった。

どうにか雨東の攻撃を防ぎきり、雲西の攻撃。残り時間はおよそ2分。ここでしくじればもう後がない。

「それじゃあ、さっきのとおり、コバはWRに、ショットガンフォーションで敵を攪乱してくれ。ラインの皆、すまないが5秒持たせてくれ。コバはストレート、他のキャッチ要員は各々好きなコースを走れ。向こうにコバへの決め撃ちを悟られるな」

久保はチームメイトに素早く指示を飛ばすと、攻撃ポジションについた。

「Set、Hut!」

久保のコールとともにボールがライン中央のポジションから放り投げられ、プレーが始まった。

「残り時間少ないからきつと久保くんは勝負かけてくると思うのよね。あつ、12番がレシーバーでまっすぐ走った! パスで一氣にタッチダウン取るの!？」

智美が興奮してはしゃぎ、絵里子と有希は冷静に試合の流れを眺めていた。グラウンドの端っこにいる久保ファンの応援団は黄色い声援を送り続けている。近くにいるスカウトマンたちは、それを見てよく声が枯れないな、と感心してる人もいた。

「よし、行くぞ! 受け取れーーーー!」

久保は絶叫とともにコバに向けて豪速球パスを投げた。素早く高杉が反応して止めようと腕を伸ばしたが、かすただけでボールの勢いは衰えず、ボールはコバに向かって一直線に飛んでいく。だが、コバとの間に何かが立ちふさがった。

「え?」

捕球体勢に入ったコバは、いきなり目の前に現れた大きな影に視界をふさがれ、ボールを見失った。

「もらった！」

コバの視界を塞いだ大きな影は、雨東のFS、大貫フリーセーフ二あめぬきだった。彼は高杉が弾いて少しスピードが落ちる間にボールとコバの間に滑り込み、インターセプトの体勢を作り上げた。

「ああっ、ボールが取られちゃう！　せつかくのパスがー！」

絵里子と有希が大慌てしている中、今まで騒いでいた智美が静かなことに有希が気づいた。

「トモ、どうしたの？　ピンチなのに、ずいぶん静かじゃない？」

有希がたずねると、智美の身体がガクツとうなだれた。

「トモ！？　どうしたの？　大丈夫！？」

慌てて身体を支えてやり、肩を叩いて起こそうとするが、智美はそのまま倒れこんできた。どうにもならないと様子を見始めた、そのとき。智美の身体が淡く光り、それと同時にグラウンドでどよめきが起った。

何事かと智美を支えながら絵里子と有希がフェンス際へ駆け寄り、そこからグラウンドを見下ろすと、さっきまでボールの捕球体勢に入っていた大貫が立ち尽くし、コバがボールをキャッチしてタツチダウンを挙げていた。

審判団もなにが起ったのかわからず、ただタッチダウンを挙げたことを知らせるホイッスルだけを鳴らした。と、そのとき智美が目覚ました。

「今のは……あたしがやったことかも……　ボールが敵に捕られると思った瞬間に気が遠くなって……　完璧には覚えてないけど、なんとなくあたしな気がする……　あたしのせいで試合がめちゃくちゃになっちゃった……」

智美は自分の足で立ち上がると、ボソツとつぶやいた。

「トモ……？　とりあえず、落ち着きなよ。いま、ユッキーが下の出来事を耳を済ませて聞き取ろうとしてるから」

絵里子がひとりで自分を責め続ける智美を制止していると、

「状況がわかったわ。今は、大貫っていう、さつき12番のコバ選手の前に立ちふさがってボールを奪おうとした選手が捕ろうとしたときに、急にボールの軌道が変わってコバ選手の手の中に落ちてきたそうよ」

有希が聞き取った内容を2人に伝えると、

「やっぱあたしのせいだ……あたしの中のこのチカラが試合を壊したんだ。これ以上見てるとさらに変なことしそうだから、あたし帰る。結果はあとでメールでもしてくれる？」

智美は絵里子と有希にそうまくし立てると、振り向いて屋上から駆け下りていった。

結局、いまのタッチダウンは審判団の協議の末、正当なものと認められ、雲西高校フェニックスが28-27で雨東高校ブループラネッツを下し、決勝進出、および関東大会進出も決めたのだった。

FILE・08：試合後……（前書き）

今回は前後の話のつながりの関係上、少し短めです。

FILE・08：試合後……

「トモ、大丈夫かな……半分泣いてたように見えたけど……」

試合が終わり、静かになったグラウンドを見下ろしながら、絵里子がつぶやいた。

「わからないけど、しばらくは引きずるかもね。いつもはあっけらかんとしてるけど、今回ばかりは、ねえ……」

有希もその横でフェンスにもたれかかって智美を心配するようにつぶやいた。

「……試合終わっただし、帰ろうか？」

しばらく静寂が続いたあと、絵里子が有希にたずねた。

「そうだね。トモに結果を教えてあげないといけないし」

有希も同意し、屋上から降りて帰ろうとした、そのとき。

「あっ、エリ、ユキ！ トモに聞きたいことがあって探してるんだけど、知らない？」

智美や有希のクラスメートで久保のファンのひとりが階段を上がつてきていて、絵里子たちを見つけると開口一番にそうたずねてきた。

「トモなら試合が終わる間に帰ったわよ。急用ができたから、あとで結果をメールして、つて言い残して。そんなに慌ててどうしたのよ、カノ。なんかトモに話があるんなら伝えるよ？」

絵里子が智美はいないと答えると、

「そう……ねえ、あのとき何があったのか、エリたちは知らない？ 最後の得点シーンの珍プレーのことなんだけど、何人かが、あのとき屋上でトモが不思議な光を発してるのが見えたって言ったの。で、屋上にいたトモ自身や近くにいたエリたちなら何か知ってるんじゃないかと思ったんだけど……」

ファンの女の子——カノこと佳乃子^{かのこ}は、絵里子たちに事情を話した。

「うーん、正直何が起こったのかはわからないのよね。たしかにトモの体が光って何かが起こったみたいだけど……私たちの口から話せるのはそれだけよ。でも、しばらくはトモ自身にその話はないであげて。帰るとき、少し泣いてたように見えたから……」

絵里子は佳乃子にそう頼むと、有希とともに帰路についた。

その後絵里子や有希は何度も智美にメールしたが、返事が返ってきたのは最初の一回——試合の結果に関することだけだった。あとの智美を心配するメールはことごとく返事のないまま、週明けの月曜を迎えた。

「トモ、おはようっ！ もう大丈夫？」

登校してきた智美を見つけて、先に来て話をしていた絵里子と有希が駆け寄った。

「うん、もう大丈夫。メール返さなくてゴメンね」

智美は軽く舌を出して謝った。と、

「トモー、あんたに客だよー」

別のクラスメートがそう言って智美を呼んだ。

「あたし？ わかった、今行くねー」

智美はそう言いながら教室の入り口に行くと、隣のクラスの“久保ファンクラブ”の女子たちがいた。だが、智美が来ても何も切り出さないでいたので、

「あたしに何か用なの？」

智美から単刀直入にたずねると、

「……五十嵐さん、こないだのアメフト部の試合が勝てたのはあなたのおかげらしいですね。そのお礼を言いに来たの」

数人の女子で構成された中のひとりがそう言って軽く頭を下げた。

「え？ え？ なんのこと？」

いきなり礼を言われるとは思わなかった智美は戸惑いの声を上げる。

「試合の最後のほうで起きた謎の珍プレー、あれは五十嵐さんの不思議な力によるものらしいじゃないですか。それで勝てたんだから、久保くんの、ひいてはアメフト部のフアンクラブとして礼を言わせてください」

別のひとりが智美に言つて、そこにいた全員が一斉に頭を下げた。
「……帰つて。こんなチカラのことでお礼を言われても嬉しくないし、結果的にズルしたことになるのよ。あたしも久保くんを応援してるから、勝つてほしかったけど、こんな形で勝つて、本当に満足なの？ ましてや、こんな形で負けた雨東の選手の気持ちはどうなるの？ いくら三位決定戦で勝てば同じ関東に行けるとはいえ……」

智美は再び泣きそうになりながらフアンクラブの女子たちに帰れと言った後、彼女たちに問いかけ、答えを待たずに自分の席に戻つていった。と、そこに……

「君たちこんなところで何やってるの？ 教室に入る人が通れないよ」

久保が登校してきて、フアンクラブに苦言を呈した。

「ご、ゴメン……」

すぐさま道を開け、久保を教室に入れた。と、智美の席の近くに行くのと、

「話があるから、昼休み屋上に来てくれないか？」

久保はそう智美に耳打ちした。智美は突然の呼び出しに驚いて声も出せず、ただ頷くだけしかできないのだった。

FILE・09：最終話 全ての決着（前書き）

久保が智美を呼び出した理由とはいったいなんなのか？

FILE・09：最終話 全ての決着

約束の昼休み、智美は絵里子たちの誘いを「ゴメン」と言って断り、久保が待っているはずの屋上に向かった。

智美が屋上の扉を開けると、久保らしき男子生徒がフェンスに寄りかかって待っていた。ただ、真正面からの日差しに顔が確認できなかった。

「久保……くん？」

智美は静かに問いかけた。

「ああ、五十嵐さん。来てくれたのか」

久保は寄りかかっていたフェンスから勢いよく離れると、智美のほうに歩み寄ってきた。

「それで、あたしに話って？」

智美が単刀直入に、しかしおそろおそろ話を切り出すと、

「昨日の試合に勝てたのは五十嵐さんのおかげだって噂を聞いたんだ。しかも普通じゃありえない何かによるものだってことも。それは本当なのか？」

静かに久保は話を切り出した。智美はどう言おうか少し考えつつ、久保の目を見た。久保が真剣に聞いているのなら全部話してついでに告白もしてしまおう、とそこまで考えながら彼の目を見ると、久保は問いかけてから一瞬たりとも智美から視線をそらさず、じっと真っ直ぐに見つめて答えを待っていた。

「……うん、あたし自身は自覚なかったけど、エリやユッキーが言うには、あのとき、あたしが突然意識を失って、体が淡い光を放って、みんなが噂してる珍プレーにつながったみたい。それに、こないだ階段から落ちて頭を打ったあの日から、あたしにはモノを浮かせる不思議な力が備わっちゃったみたいだから、あたしのせいで間違いないと思う。久保くん、あたしのせいで試合をめちゃくちゃにしてゴメンね」

智美も静かにすべてを話して、久保に試合をめちやくちやにしてしまったことを謝った。

「なんで謝るの？ 俺は礼が言いたかったから来てもらったんだ。教室だとちよつと照れくさいからな。それに――」

久保は智美が謝ってきたことに意外そうな表情をして呼び出した理由を話した。最後に何か付け加えたようにも聞こえたが、うまく聞き取れなかった。

「じゃあ、あたしを許してくれるの……？」

智美は不安そうな表情で久保にたずねた。

「許すも許さないもないだろ。あれは事故みたいなものだ。雨東の奴らには気の毒だけど、あいつらなら三位決定戦に勝って必ず関東大会に上がってくるはずだ。そのときこそ本当の決着だ。まあ、当たればの話だけだよ」

久保はあっけらかんとした表情で智美の肩を叩いて言うつと、

「まあ、その話はおまけで、ここからが本題なんだが、いいか？」

再び真面目な表情に戻って智美を見つめた。

「えっ……？ う、うん、いいけど、何？」

智美は驚いて一瞬声に詰まるが、なんとか聞き返した。

「俺、今のクラスになって五十嵐さんと出会えてよかった。半年くらい同じクラスで過ごしてきて、どうしようもない気持ちに気づいたんだ。ホントは迷惑かもしれないから胸の内にしまっておこうと思つてたけど、溢れるばかりで抑えきれそうにない。だから、すべてぶちまけるけど、俺、君のことが好きだ。俺と付き合つてほしい。それと、よかったらアメフト部のマネージャーをやつてほしい」

まさかまさかの久保からの告白に、完全に思考停止した智美はしばらく固まっていた。

「ゴメン……やっぱ迷惑だったかな？」

久保がしよげかえつて立ち去ろうとしたが、

「違うの！」

智美の大声に足を止め、振り向いた。

「違う……あまりに急すぎたのと、先手を取られたので驚いてただけなの」

智美は泣きそうな声で久保に声をかけた。

「先手を取られた、って、まさか……」

久保が駆け寄ろうとするが、

「来ないで！ 泣き顔は見られたくないから……」

智美の強い制止に、久保はその足を止めた。

「そうよ。あたしもずっと久保くんのが気がなつてた。それこそ久保くんがアメフト部のエースになる前から。でも、あたしに勇気が足りなかったから言い出せずにいたの。そんなこと言ったらいつまでも進展しないのはわかってたけど、あたしはそれでもよかった。変に告白して断られるのを怖がってた、ただの臆病者って言われたらそれまでだけだね」

ようやく涙が止まったのか、智美はわずかに笑みを浮かべて久保のほうに向き直った。

「五十嵐さん……いや、これからは智美って呼んでいいかな？」

久保は振り向いた智美に歩み寄ると、軽くその肩を抱き寄せてたずねた。

「もちろんよ。もう両想いで恋人同士なんだから、いつまでも苗字で呼びあつてるのもおかしいでしょ。ね、隆文くん」

智美は笑いながら言つと、自分からも腕を伸ばして久保に抱きついた。と、そのとき。

「あれっ？ 智美、なんか光ってないか？」

抱き合つた格好のまま、久保が素つ頓狂な声を上げた。

「ホントだ……なんだろう、これ？ チカラを使うときの光に似てるけど、いまは何もしてないし……」

淡い光に包まれたまま、智美がつぶやく。と、光が智美から離れ、空に昇りはじめた。

「なんだかわからないけど、きれい……」

「ああ、きれいだな……」

2人で空に昇りゆく光を見つめながら抱き合っていると、突然屋上の扉が開いた。

「あつ、トモ、こんなところにいたの？」

そこに現れたのは絵里子と有希だった。

「エリ、ユツキー、2人ともどうしたの？」

慌てて抱き合うのをやめ、智美が取り繕うような笑顔で絵里子たちにならずねると、

「どうしたもこうしたもないわよ。さつきお昼誘ったとき、妙に思い詰めた表情してるし、すぐにどっか行っちゃったから心配になって探してたのよ。まあ、心配が杞憂に終わってよかったけどね。なんならもつと抱き合ってもいいわよ？ 私ら邪魔者は退散しますから。ユツキー、行こう。クラスみんなにこのことを教えてあげないと」

絵里子たちはニヤニヤとした笑みを浮かべながらそそくさと退散しようとした。

「あつ、こら！ 余計なこと喋ろうとするなー！」

キヤーキヤーと逃げる絵里子たちに、追う智美。あまりに騒がしすぎて、あとで3人まとめて先生に捕まりお説教を受けたのは言うまでもない。

そして屋上に残り残された久保は……

「さつきの光は……なんだったんだろ？ まあ、いつか。俺も1人でいつまでもここに意味もないし、教室に戻るかな」

などつつぶやき、屋上を後にしたのだった。

そして、数日後。

「えーっ！？ チカラがなくなっただって、ホント？」

放課後の教室に、絵里子の驚きの叫びが響いた。

「うん、きれいさっぱりなくなってた。こないだ隆文ちゃんと抱き合ってるのを見られた日に、2人が来る直前まであたしの体から光が空へ昇っていったの。だから、もしかすると、そのときにチカラがなくなっただのかも」

智美は数日前のことを改めて説明し、“抱き合ってるのを見られた”と言ったときに思いつき赤面した。

「結局なんだったんだろうね？」

絵里子が不思議そうな声を上げた。

「わからないけど、神様があたしと隆文くんをくつつけるために一時的に与えてくれた不思議なチカラ……そう考えるとロマンチックじゃない？」

智美は少し恥ずかしそうに、でもきっぱりと言い放った。

「あゝはいはい、ごちそうさまでした」

どうやらこの数日間にかなりノロケ話を聞かされていたらしく、うんざりした表情で絵里子が手をパタパタと振った。

と、そこに、

「智美！ 部活行こうぜ！」

掃除を終えて戻ってきた久保が智美を呼んだ。そう、智美は久保からの告白と、マネージャーやってくれとの頼み事を両方快く受けたのだ。

「うん！ いま行くね隆文くん！」

FILE・09：最終話 全ての決着（後書き）

ふう、リハビリに使うために即興で用意したこの作品、一応これで完結となります。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

休載している『幼なじみは魔法使い！？』は、これからストックを追加し始め、メドがたった時点で連載再開したいと考えてますので、もうしばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3130d/>

事故と恋心と。

2010年10月8日15時50分発行